

平良港における造礁サンゴ群集の回復状況について

平良港湾事務所 整備保全課 整備保全課長 ◎荻 ^{おぎ} ^{さだはる} 定治
保全防災係長 ○高石 ^{たかいし} ^{まこと} 信

1. 目的

サンゴ礁生態系は、近年、陸域からの汚染や水温上昇による白化現象などによって、危機的な状況にある。そのため、サンゴが生息する地域全体を視野に入れた総合的な計画として、平成 22 年 4 月、環境省により「サンゴ礁生態系保全行動計画」が策定された。

同計画で、社会基盤整備とサンゴ礁生態系保全の調和に向けた方策の一環として「サンゴが着生しやすいブロックの活用やサンゴの移植・移築など、サンゴ礁と共生するみなとづくりに向けての取組を推進する」ことが謳われているところ。

平良港は地域に密着した重要港湾であり、同港の整備は宮古島市民の生活に直結する大変重要なものである一方で、周辺海域における豊富なサンゴ礁生態系の価値を改めて認識し、その資源利用とそれにより育まれる地域の文化が発展していくことが望まれる。

そこで、当事務所においては過年度より港湾整備とサンゴ礁生態系保全の調和に向けた方策の一環として、港湾区域におけるサンゴ群集の調査を継続的に実施しているほか、防波堤整備予定地にあるサンゴを採取し、別の場所への移植を実施するなど、更なる移植技術の向上を目的として、当該移植サンゴに関するモニタリングを継続的に実施している。

2. 内容

平良港では、港湾整備に伴う環境保全を目的とする「サンゴ群集調査」を平成 16 年から平成 23 年にかけて定期的に実施している。

具体的には、砂山地区、下崎西防波堤港外側、トゥリバー地区について、サンゴ類の種類、群体系、被度等を観測・記録し経年変化の調査を行っている。また、港湾整備によって設置された人工構造物等に着生したサンゴの状況、過去に移植したサンゴに関する状況についても経年変化をモニタリングしている。本報告はその状況報告を行うものである。

3. 結論

過年度の調査結果と比較すると、平成 22 年度においては、下崎西防波堤港外側、砂山地区を中心にして、平良港全域でサンゴ類の被度が回復していることがわかった。

また、高水温におけるサンゴ群集への影響については、H16～22 において顕著な白化現象は見られなかったが、H19,21 に浅場で 30 度以上の高水温となった際、一部で白化現象が見られた。

なお、夏期の海水温上昇や外敵の大量発生等、成長阻害要因となりうる現象が少なかったことが、群集の回復傾向の要因と考えられる。

4. 今後の問題点

各調査の目視観察により、多くの稚サンゴの新規加入が確認されている。今後さらに被度の回復が進むと考えられる。

上述した人工構造物等に着生したサンゴや過去の移植サンゴに関する被度の向上については、現状を踏まえると非常にゆっくりとしたペースで進むものと考えられるため、今後の継続的なモニタリングが必要となる。